# 編集後記

2024年のノーベル賞物理学賞には「AI（artificial intelligence）の中核を担う機械学習の基礎への貢献」，化学賞では「AIによるたんぱく質の構造予測」に対して授与された．著者はスウェーデン・カロリンスカ研究所への留学経験があり，科学系のノーベル賞の選考については「社会的価値が確立され，人類に益するもので主要な貢献者が3人までに絞られる場合」という条件があると聞いたことがある．

今年度のノーベル賞から読み取れることは，世界を牽引するものとしてAIが確固たる役割を担うに至ったことである．

AIを牽引する主要企業にGoogleがあるが，学術研究で汎用されるGoogle ScholarのWebのトップページには「巨人の肩の上に立つ」という言葉が掲げられている．AIにおいては「巨人の肩，すなわち今日までの膨大な知見の上に立ち，それらを活用する」という特徴も表されているように思える．医学の一分野である精神医学も先達の足跡の上に立脚している．研究を進めるためには今日までの成果を踏まえ，まさに巨人の肩の上に立って俯瞰的に研究を進めていくこと，そしてそれらの知見を踏まえて診療など臨床活動を進めていくことが求められる．

そのような社会の状況のなかでの和文誌としての本誌の位置づけはどのようになるであろうか．まず今日ではこれまでの知見だけでは十分とはいえない社会的課題が山積しているように思う．わが国の現状だけを考えても，自然災害，少子高齢化に関係する2025年問題，2040年問題，消滅可能性自治体の存在など人口減少，自殺，虐待やいじめなどさまざまな社会的課題がある．日々の精神科臨床において地震・台風など自然災害の問題，希死念慮などの自殺に関連する問題，家族の問題など社会的課題が少なからず出てくるが，これらの問題が精神衛生の面で多大な影響があるため，精神医学研究の対象になっている．

わが国では近年の大気汚染など公害問題についてさまざまな疫学調査や実地調査を通して状況把握し，科学技術の進歩により原因究明と対策を行ってきた経験がある．社会の諸課題に取り組むうえでは教育学や社会学，法律学や疫学など諸々の学問分野と力を合わせて精神医学的なアプローチが図られており，日本精神神経学会のシンポジウムでは学問分野が多彩な演者で構成される学際的な内容が増えている．すでに災害や自殺など諸問題に対応する精神科関連学会が設立され，災害派遣精神医療チーム（disaster psychiatric assistance team：DPAT）も組織化されるなど，本学会の会員が尽力するなかで日々の取り組みを進めている．

そのような研究上の成果については，いち早く新規性が認められ，広く世界的に知られていくことも大切であるが，一方で学問的価値を高めるためには研究活動より得られた知見に基づく思索や論考が時間をかけて深みを増し，熟成していくことが重要だと思う．思索を深めるためにも新たな発想に基づく考察が必要である．社会的課題に対して真剣に悩み，深い思索を行うような場合，固有の言語文化的背景もあることから母国語でのデータ収集や考察が行われることは自然だと思う．また介入的研究を行う場合などで対象者（被験者）との会話は母国語である場合がほとんどであろう．そのためわが国の諸課題に関する記録や考察を日本語で記載していくことには意味があると思う．

『枕草子』や『源氏物語』など文化的価値のある古典文学や優れた日本の小説は翻訳によって海外に知られるところになっている．聖書がもともとはヘブライ語やギリシャ語で書かれ，世界中の言語に翻訳され続けているように，本質的な価値のあるものは言語の障壁を超えていく．AI技術の導入によって翻訳精度が飛躍的に高まり，言語間の垣根はさらに低くなっている．

1つのところに地中深くに根を伸ばした樹木が幾星霜の歳月を経て生きていくように，学問の真理に関しても各研究者が母国語で考えるなかで深みを増していくものではないかと思う．AIの活用が一般化し，ボーダレス化・グローバリゼーションの波のなかではあるが，この地に根を張って，日本の社会にとって必要で心に響くような研究や論考が発表され続けることが期待される．

谷井久志